

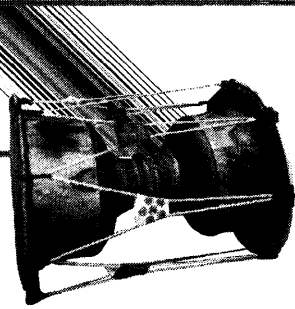
한국 조선의 문화와 사회 12호



【特集】
アリランをめぐる
音・ことば・語り

韓国朝鮮の 文化と社会

韓国・朝鮮文化研究会



12
2013.10

風響社

特集IIアリランをめぐる音・ことば・語り

〈問題提起〉

《アリラン》の複数性と複合性——葛藤と統合のなかで 植村幸生 7

〈論文〉

植民地朝鮮のレコード検閲とアリランの位相

——複製技術時代の上演的近代と音声統制 山内文登 19

忘れられた冷戦下の〈アリラン〉

——一九六三年南北単一チームの国歌になるまでの南北朝鮮におけるカノン化過程 林慶花 69

論文

フィールドワークを歴史化する

——ヴィンセント・ブランドの韓国村落調査（一九六六年）をめぐる 板垣竜太 110

朝鮮民主主義人民共和国における計画経済と「市場化」の相互補完関係に関する一考察 文聖姫 150

研究ノート

中国の朝鮮族にみられるシャーマニズム的現象に関する一考察 許銀珠 192

彼ら彼女らの資本主義——「富と威信」再考 本田 洋 214

研究の周辺

音と文字の間 嶋陸奥彦 225

展評

花卉草蟲——花と虫で綴る朝鮮美術展 安在媛 231

ひろば／マダン

台湾における韓国研究ワークショップ 嶋陸奥彦 237

ソウル大学における日本研究——日本研究所を中心に 坂崎基彦 241

彙報

韓国・朝鮮文化研究会会則

編集後記

英文目次・ハングル目次

執筆者一覧

フィールドワークを歴史化する

ヴィンセント・ブランドの韓国村落調査（一九六六年）をめぐって

板垣 竜太

一 はじめに——本稿の背景と目的

米国の人類学者ヴィンセント・ブランド (Vincent Selden Randolph Brandt、一九二四、敬称略) といえ、『韓国の村落——農地と海のあいだ』(A Korean Village: Between Farm and Sea) [Brandt 1971] の著者として知られている。同書は、一九六六年に彼が忠清南道の西海岸にある石浦ソクポ (仮名) という村落において実施したフィールドワークにもとづいてまとめられた民族誌 (ethnography) である。その概要は後述するが、「欧米人によって作成された韓国の農村に関する最初の本格的民族誌」[全京秀 二〇〇四：二九二]とも表現されているように、同書は韓国の村落社会をフィールドとする人類学等の研究分野においては必読書ともされてきた古典的な著作である。にもかかわらず、人類学的研究を始める前の彼の前歴や、同書出版後の経歴や業績、当該フィールドワークの背景等については学界で知られているとはいえない。本稿は、この民族誌とそれになったフィールドワークを歴史化することを目的としている。

まず、本稿の背景を説明しておこう。私は二〇一〇年に米国在住のブランド邸を訪問する機会を得た。二〇〇九年から一〇年にかけて、私はハーヴァードイェンチン 燕京研究所で客員研究員として研究していたが、その期間に

住んでいたアパートの大家が、実はプラントであった。ハーヴァード通り沿いにあるプラント所有のアパートは、ハーヴァードに来る朝鮮半島研究者に代々引き継がれてきたようであり、私もたまたま一年間その恩恵を受けた。私は毎月プラント宛に小切手で家賃を送りながら一度お目にかかりたいとは思っていたものの、ヴァーモント州の山奥に住んでいるため、なかなか訪問できずにいた。しかし帰国を前にした二〇一〇年七月、私は意を決してレンタカーを借り、家族とともにパットニー (Pattney) のプラント邸を訪問した。その際、拙い英語で数時間におたつてインタビューをした。私は、彼の歩んできた道それ自体がたいへん興味深いものであると感じた。それとともに、彼が写真やノートなどの過去の調査記録資料を保持していること、一九六六年の調査時のことを回顧した *Affair with Korea* と題された著書の未刊行原稿があることなどを確認した (以下、単に「回顧録」と略すときがある)。この回顧録は米国内の出版社に持ち込まれたことはあるが、出版には至らず、一九九四年三月の日付のついた原稿のまま放置されていた。私は、韓国であればきつと出版してくれるところがあるに違いないと言い、タイプ原稿を借りてコピーをとった。

在外研究終了後、私は二〇一〇年八月に韓国に行き、その際にソウル在住の友人・藤井たけし (当時・歴史問題研究所研究員) にこの件について相談した。藤井は、国史編纂委員会 (国編) の研究士である李相祿 (イサンノク) に、海外所蔵資料として収集することを提案した。国編はこれに関心を示したので、私は手持ちの基本資料を全て提供した。二〇一〇年一〇月、成均館大東アジア学院先任研究員 (当時) の李庸起 (イヨンキ) と国編の研究士が、国編の調査員としてプラント邸を訪問調査した。調査記録資料を国編への貸与、整理、複製の意思を確認するとともに、詳細な内部報告書 [이끼기 2010] を作成した。これを受けて資料収集事業が具体的に進められることとなり、二〇一〇年一二月、国編の研究士が再訪して資料を借り受けた。その後、資料の整理、スキャン作業および回顧録の韓国語訳作業が進められた。その一結果として二〇一一年二月、回顧録 *Affair with Korea* が国史編纂委員会の海外資料叢書二四『韓国でおくった日々——人類学者ウィンセント・ブラン博士の村落現地調査報告』 [Brandt 2011]

として翻訳刊行された。念願の出版に、ブラントはたいへん喜んだ様子であった。

二〇一二年三月、私は国編を訪問し、整理中の資料を閲覧した。写真は整理が済み、スキャンも完了していた。一方、整理途中のノートを開覧した結果、肝心の一九六六年のフィールドワーク関連の記録が、写真を除いてほぼ全て脱落していることを発見した。私はこの件についてブラントに問い合わせた結果、石浦調査関連のノート一五冊分が国編への貸与から漏れていたことが確認された。ブラントはこの脱落分を、ハーヴァード大学のピーボディ博物館 (Peabody Museum) に寄贈した。国編に貸与した資料も、整理が済んだ後は最終的に全て同博物館に寄贈される予定だという。

二〇一二年一月、私はブラント邸を再訪し、再度インタビューを実施した。また、ピーボディ博物館に行き、寄贈されたノートを開覧、撮影した(その後、ピーボディ博物館は、一五冊のノート全てのスキャンを完了した)。

以上の過程を経て、ブラントの『韓国の村落』について、回顧録、フィールドノーツ、写真、本人へのインタビュー記録など、再検討するための素材が一通り出そろった。古典的な民族誌について、著者の存命中にこうしたまとまった情報が得られるのは幸運なケースに属する。人類学においては、一九八〇年代以来、古典的な民族誌を批判的に再読する作業が進められてきたが「クリフォード&マークス 一九九六等」、朝鮮半島をフィールドとする過去の研究について、原資料にまで遡って検証をおこなう作業が進んでいるとはいいたい。

ただし、私にとつての関心事は民族誌のあり方そのものを考えることではなく、過去の調査が直面していた社会の方にある。ことを換えていえば、社会史の資料として人類学的調査を活用することに関心がある「板垣二〇一」。その際に、民族誌が同時代の歴史的現実を描写してきたかどうかについて議論があることには留意が必要である。古典的な民族誌が、歴史的脈絡を外し、無時間的な「民族誌的現在時制 ethnographic present」で記されてきたことはしばしば批判的に論じられてきた [Fabian 1983]。もちろんそれは単なる記述の時制の問題ではなく、文化や社会が一般化されて語られることで、フィールドワーカーも目にしていたはずの歴史的「現在」が

民族誌の描写から省かれがちだったという点に関わっている。この点については、「実はこれまで民族誌によって、民族誌学者がそのフィールドの現在において実際に見たものなどめったに報告されはしなかった」という極論まである。「マーカス&フィッシャー 一九八九：一八三」。ブランドの民族誌にこの指摘がそのままあてはまるとは思わないし、彼は著書のなかでそれなりに当時の状況が浮かび上がるような叙述をしている。だからこそ、その叙述がどのような関係性のなかで生み出されたのかを歴史化しておく必要がある。その点において彼の回顧録が興味深いのは、かつて自らが記した民族誌からは抜け落ちていた歴史的な「現在」を、いくばくかの反省といくばくかのノスタルジーを込めて描きなおそうとしているところにある。また、フィールドノーツや写真も、一九六〇年代の韓国社会の様相を知るための興味深い一次史料となっている。そこからは、たとえば冷戦下の韓国社会における米国の存在なども浮かび上がってくる。

本稿はそうした観点からブランドのフィールドワークを辿りなおすものであるが、現時点ではまだブランドの調査を全面的に再検討する段階には至っていない。フィールドノーツはまだ細密に分析できておらず、私自身が石浦で体系的に再調査することもできていない。民族誌を読みなおし、具体的な事実関係に立ち入って検証しながら、一九六六年前後の韓国の村落社会を描き出す作業は次の課題とせざるを得ない。本稿は、その手前の第一段階の作業として、彼のフィールドワークがいかなる社会的背景のもと、どのような関係性のなかで、どのような方法でおこなわれ、そのフィールド経験のどの部分が民族誌となっていたのか、その歴史的文脈ないし社会的位相の一端を明らかにすることを主目的とする。本稿でいう「歴史化」とはそういう意味である。管見のかぎり、ブランドの業績や経歴について論文として公表されたものはない。回顧録韓国語版 [Brandt 2011] の「解題」が一応先行研究として挙げられる。だがそれは、私が調べて国編に提供した情報を含む内部報告書 [이영기 2010] を基礎に大部分が書かれており、あらためて調査・確認していないために、経歴や文献リストなどに間違いも見られる。以下、本稿では、まずブランドの経歴・業績について概観した後(二)、主著『韓国の村落』を位置づけ(三)、

そのうえで回顧録を通じてフィールドワークを歴史化する(四)。

二 民族誌以前と以後——ブランド略歴

ここでは彼の略歴を私のインタビューや履歷書をもとにまとめておきたい。あらかじめ述べておけば、彼の歩みは単なる民族誌の「背景」以上のものがある。いわば、それ自体が戦後東アジアと米国との関係の一端を示しており、民族誌の歴史化作業の重要な一環である。

ヴィンセント・ブランドは一九二四年六月一日、ロードアイランド州の港湾都市ニューポートで生まれた。ニューポートは軍港として知られるが、ブランド家も海軍の関係者だった。ヴィンセントは唯一の男子で、後継を期待されたが、色覚異常のためそれがかなわなかったという。

一九四二年に地元の米国聖公会系の聖ジョージ学校を卒業した彼は、ハーヴァード大学に入学した。入学当初は理系を目指して物理学や数学を学んでいたというが、一九四三年、在学中に志願して三年間の軍隊生活を送ることになった。米軍では欧州戦に派遣され、イタリアのスキー部隊に所属していた。一九四六年にハーヴァード大に復学し、政治外文学部(Government and International Relations Department)で学んだ。この時代の人脈が、後にOBネットワーク(Old boy network)としていぶん重宝したという。一九四八年に学部を卒業した後、彼はフランスのグールノーブル大のプログラムでフランス語を学んだ。一九四九年には外交官試験に合格し、米国大使館のストラスブル支所に派遣された。

彼にとつての最初の韓国経験はその外交官時代に訪れた。朝鮮戦争中だった一九五二年に韓国の臨時首都・釜山に派遣されたのである。彼は独身者だったからこそ苦難の地に送られたと語っていた。最初は経済担当部署(Economic Division)に所属した。ふだんの仕事はつまらないものだったというが、この時期に彼が韓国社会に目覚

めるきつかけがあった。彼によれば、ワシントンに食糧不足を補うためもつと食糧を送れと要求したところ、可能な限り現地調達せよとの回答があった。そこで食糧不足の実態調査と救援穀物 (relief grain) の調達先の視察のため、咸鏡北道出身の通訳とともに、ジープに乗って韓国の農村を回ることにした。道行く韓国人を車に乗せ、タバコをあげてはいろいろインタビュもした。通常であれば米国の外交官は韓国の現地の食を避け、C-rations という缶詰を食べることになっていたが、彼はその缶詰を現地の人にあげて、その代わりに情報、飲食物、宿の提供をしてもらった。いわばアマチュア人類学者のようなことをしていたわけである。彼はこの時期のことを「朝鮮民族にとつては最悪の時期であつたが、私にとつては幸福なひととき (a halcyon period) であつた」と回想している [Brandt 2011: 2]。この任務が彼にとつては忘れられず、通常の官僚仕事に戻つたら退屈でしやうがなかつたという。

一九五三年にはソウルに勤務地が変わり、一九五四年にはワシントンでの台湾デスク等を経て、一九五五年に東京の米国大使館に転勤した。そこで二年間の日本語教育プログラムを受けたので、彼は (少なくとも当時は) 日本語ができた。当時、外交官は通常コンパウンド (囲いをめぐらした敷地) で居住していたが、彼は麹町で一軒家を借り、改装して住んだ。庭でどうもろこしを育てたり、ヨットを購入して船旅に出たりと、悠々自適な生活をしていたもようである。また、釜山で出会い米国留学から戻つてきた鄭喜璟と、マッカーサー二世大使夫妻の媒酌で結婚式をあげたのも東京勤務時代であつた。

ここまでのキャリアだけを見ると、いかにもハーヴァード出身のエリート官僚という印象を受ける。ところが一九六〇年、ブランドの人生は三〇代半ばにして一大転機を迎えた。東京でも官僚仕事をつまらなく感じていた彼は、一年間の休暇がほしいと大使館にかけあつた。それが認められないことが分かるや、彼は辞職を願い出たのである。外交官を辞めて彼が最初にしたことは大西洋横断のヨット旅行であつた。同年一〇月、ブランドは妻と、川崎市の中学校で美術教師をしていた旧友の柏村勲を誘い、アムステルダムからヨーロッパ運河、地中海を抜け、ジブラルタルから大西洋を横断し、バルバドスを経てニューポートまでの約九ヶ月間のヨット旅行を敢行

した。その様子は『素晴らしいヨット旅行』という新書として日本で刊行され「柏村 一九六二」、当時それなりに売れたようである。

ヨット旅行を終えたブランドは、一九六一年にハーヴァード大学の大学院に入学し、東アジア地域研究と社会学を専攻した。最初から韓国をフィールドにするつもりで入学したという。私は、公費で日本語を二年間も学んだのにどうして日本ではなかったのかと尋ねたところ、釜山時代の経験がどうしても忘れられず、韓国を調査することしか考えていなかったと答えた。当時、ハーヴァードの 코리아 研究といえ、歴史学者のワグナー (Edward Wagner) が教鞭をとっていた。また、その妻のナミ・キム・ワグナーが朝鮮語を教えており、ブランドは彼女から言語を習ったという。

一九六五年、コースワークを終えたブランドは、韓国に渡った。ソウルの延世大語学堂で韓国語を学ぶなどした後、同年末に調査地として西海岸の石浦を選定した。彼が石浦に移り住んだのは一九六六年三月、帰国したのは翌年一月であり、およそ一〇ヶ月の調査期間であった。彼は一九六八年に博士学位論文「Brandt 1968」を人類学科に提出した。審査員は日本研究者のペルツェル (John Peltzer)、太平洋の島々をフィールドとする人類学者のオリヴァー (Douglas Oliver)、そしてワグナーであった。この時の調査が本稿の中心である。

ブランドは、博士論文を書き上げて間もない一九六九年、ソウルで一〇ヶ月間ほど新たな調査のため滞在することになった。調査対象は、ソウル西大門区にあった板子村 (パンジャチョン) (スラムないしバラック街) であった。彼はこの際に、メキシコの都市下層を調査して「貧困の文化」を描き出したオスカー・ルイスの著作「ルイス 二〇〇三他」を意識して研究を進めていたという。調査に際しても研究助手を何人か雇い、四つの板子村で同時に調査を進めるといふ、かなり本格的なプロジェクトであった。その姿が目立ったのか、当時の大衆雑誌にも「豆腐チゲ、キムチにマッコリ好きの真の博士」との形容詞で報道されている。しかしながら、いくつか論文は発表されたもの (Brandt 1971, 1973, 1982a) ほどまとった著書にまでは至らなかった。

一九六九年からブラントは、ペンシルベニア州にある名門リベラル・アーツ・カレッジであるスワースモア大学の助教 (Assistant Professor) として就職した。しかしこの職位は一九七二年までしか続かなかった。彼によれば、調べたり学んだりするのは好きだが、教壇に立つて教えるのは性に合わないことに気づいた。そのため、韓国での調査のための資金がとれたのをきっかけに辞めてしまったという。その後、彼はハーヴァード大その他で非常勤講師を勤めたことはあるが、生涯、大学でテニユア (終身在職権) を得ることはなかった。ハワイ大での就職の話もあったが、ある理由で面接をすっぱかしてしまい、霧散してしまった。それでも資産、外交官時代の貯金、研究費などで生活・研究はまかなうことができたと言っていた。

その後のブラントの韓国社会に関する研究課題を、自筆の履歴書 (一九八七年作成) から整理すれば次のとおりである。

一九七一〜七二 農村から都市への移住とソウルの板子村

一九七五〜七七 農村開発とセマウル運動

ソウル移住者の適応

中小企業

一九七八 七つの革新村における開発計画の評価

一九八〇 脱北者へのインタビューを通じてみた北朝鮮社会

一九八〇〜八一 I B R D 農村基盤計画の効果についての評価

一九八三 三地域における農村青年の態度

一九八五 ビジネス・政府間関係

一九八六〜八七 学生運動

ブランドが公刊した業績（末尾の著作目録を参照）と照らし合わせれば、およそ同じ時期に研究課題に対応した論文を公表していたことが分かる。詳細は不明だが、当時は研究資金が潤沢に得られた、OBネットワークが役に立つこともあったと語っていたことから、これらの研究プロジェクトに際しては米国等からさまざまな助成金を獲得していたと考えられる。

これらの研究のうち、ここでは二つのものだけ言及しておこう。一つは、一九七〇年に朴正熙大統領が提唱して開始された、農村近代化・農家所得増大・農業生産力拡大を目標としたセマウル運動に関連した諸研究「Brandt 1973b, 1977a・b・c, 1978a, 1979a・b・c・d, 1980a・c・d, 1981a・b」である。一九七五年にユネスコ本部が「韓国セマウル運動理論定立のための比較研究事業」（予算額五万六千ドル）を採択し、その研究委員としてソウル大の李萬甲イマンガや海外の諸研究者とともにブランドが委嘱された。インタビュで彼はトップダウン型の政策には好意的ではなかったと語っていた。実際、住民たちの不満の声も拾っているし「Brandt 1979a: 80-81」、一九七七年の新聞のインタビュ記事でも、セマウル運動がもたらした変化に驚きを示しつつも、「寛大さ、厚い歓待、相互尊敬心、ゆつくりとして静かなリズムが最近の韓国農村で消えつつある」と指摘している。⁴ただ、韓国政府側からみれば、セマウル運動の意義を理解し、海外にも発信してくれる米国の学者として位置づけられていたのではないかと考えられる。この点については次節で言及する。

もう一つ興味深いのは、学生運動に関する研究である。一九八〇年の光州事件以降高まる民主化運動を背景に、彼は一九八三年頃から光州のカトリック系の運動を中心に調査した。秘密裏にリーダーらと会って話を聞いたりしたため、なかなか成果を公表しづらく、発表する際にも人物等が特定されないように一般的な表現しか使えなかったこともあった。一度米国で講演をしたとき、フロアから「この発表のリソースは何か」といった質問を受けたことがあったが、ブランドは韓国大使館から派遣された人物だったのではないかと推測していた。そ

うしたこともあって、この主題について報告原稿はいくつかあるが、まとまった論文は出されていない。彼は、この調査を通じて学生運動から影響をうけ、自らがとても「ラディカルになった」(radicalized)と語った。実際、一九八五年に高麗大亜細亜研究所で開催された国際会議で、光州事件にも触れながら、学生らのあいだに自由や民主化への進歩的で革命的な「熱望」が存在すること、にもかかわらず韓国社会に根付いた権威主義や集団主義などその阻害要因が様々存在するため、熱望がユートピア的にならざるを得ないことなどについて論じていた⁵ [Brandt 1985b: 12-16]。彼はインタビューで冗談ぽくこう語った。「私は米政府のために働く冷戦の戦士からスタートして、最後は光州のカトリックによってラディカルにされてしまった」。

一九九〇年代に入ると、石浦を再訪して回顧録を著した他にはほとんど研究論文は公表していない。今はパットニーの山奥で、夫婦二人、絵を描いたりしながらのんびりと暮らしている。

こうしてみると、彼がその気にさえなれば、冷戦期米国の地域研究 (area studies) の波にのって、大学のテニユアを得たり、米韓で盛んに著書を出版したりすることは可能な条件が整っていたように思われる。だが、彼はそこからのみ出して行った。多分に悠々自適でマイペースな彼の性格にも起因しているようでもあるが、経歴や業績は時代の枠に収まりきるものではない。かつてウォーラステインは、第二次世界大戦と冷戦の産物である地域研究が学問の再編という「意図せざる帰結」をもたらしたと述べたことがあるが⁶ [Wallerstein 1997]、それとはまた別の意味で、ブランドの軌跡や仕事も「冷戦期地域研究の意図せざる帰結」だったといえるかもしれない。そこに彼のフィールドワークを歴史的文脈のなかで辿りなおす一つの意義がある。

三 民族誌の位置づけ

ここでブランドの名著『韓国の村落』[Brandt 1971]の主要内容、背景、理論的および社会的な位置づけについて

整理しておきたい。同書は次のような九章から構成されている。

1. 序論 (Introduction)
2. 問いと理論 (Problem and Theory)
3. 環境と経済 (Environment and Economy)
4. 階級、地位、流動性 (Class, Status, and Mobility)
5. リネージと世帯 (Lineage and Household)
6. 親族をこえて——— 結束の解剖 (Beyond Kinship: The Anatomy of Solidarity)
7. 葛藤と不調和 (Conflict and Malintegration)
8. 個人とコミュニティ (Individual and Community)
9. 観念体系と結束——— 構造的解釈 (Ideology and Solidarity: A Structural Interpretation)

まず問いがあり、調査地の概要を説明したうえで、社会階層、親族、コミュニティ、人のつながりなどを論じていくという構成は、ある意味、社会人類学の民族誌の典型であるといえる。一・八・九章は単行本で新たに付け加えられた部分であるが、それ以外は博論 [Brandt 1968] からほぼそのまま受け継がれている。

調査地は忠清南道泰安郡 (ブランドの調査時は瑞山郡に属した) の石浦である。仮名を用いたのは、七章などを中心に近親相姦問題をも含むプライバシーを描いているためだという。実名は割と簡単に分かってしまうのであるが、ブランド本人が回顧録でも明かさなかったため、ここでは「石浦」で通すこととする。調査時点 (一九六六年) で一〇八世帯、人口六八九名の半農半漁村であった。瑞山の邑内から泰安の中心地までバスで二時間半行き、そこから海岸の茅項までバスに乗り、停留所からさらに小径を二時間歩いてようやくたどり着くような辺鄙な場所

にあった。当時は電気も電話も水道も通っていないかった。水田の所有は一世帯当〇・三八町歩でおよそ全国平均程度だったが、畑の〇・二五町歩は平均の半分未満であり、漁民の場合は土地を持たない者も多かった。村は六つの班からなる三つの小集落（マウル）で構成されていた。一・二班は、著書で「両班地区」^{ヤンバン}（Yanban Neighborhood）と呼ばれており、二・三戸の全州李氏を中心として（他は七戸）、主として農業を営んでいた。三・四班は「大村」（Big Hamlet）と呼ばれ、漁業が中心の四六戸の集落であった。姓も金海金氏や南平文氏など様々であった。五・六班は「向こう」（Over There）と呼ばれており、石浦のなかでも小高い峠を隔てた孤立した場所に位置し、主に農業を営む金海金氏等の三三戸が住んでいた²。

調査法は参与観察が主であったが、後述のように質問紙調査も併用していた。調査費用は、国防外国語奨学金（National Defense Foreign Language fellowship）と国立保健機構奨学金（National Institute of Health fellowship）が謝辞に記されている。インタビューによれば、特に国防や健康に関連した内容の助成金ではなく、まだ研究の少ない地域を研究するための奨学金だったという。米国の複数の公私機関が基礎的な地域研究に投資していた時代のものと思われる。

本書の基本的な枠組は、「農業と漁業のあいだ」とも意識可能なサブタイトルに言い表されている。すなわち石浦という一つの村のなかでも、人々が結束（solidarity）する際に、次のような相違する二系列の観念体系（ideology）のモデルが存在しているということである [Brandt 1971: 22-23]。

親族 (kin)

共同体 (community)

農業 (farming)

漁業 (fishing)

階層的組織 (hierarchical organization)

平等主義 (egalitarianism)

血統上の地位 (lineage rank)

個人のカリスマ (personal charisma)

威信ある (prestigious)

庶民的な (vulgar)

儒家家族儀礼 (Confucian family ritual)

シャーマニズム、アニミズム

自制的 (restraint)

非自制的な自己表現 (unrestrained self-expression)

これらのモデルは「観念体系」とも「価値体系」(value system)とも「倫理体系」(ethical system)とも言い表されているが、いずれにしても親族的な結束または共同体的な結束のどちらか一方の原理で村が支配されているのではなく、両者がともに作動しながら折り合いがつけられていることに注目した点に特徴があった(以下、「三重モデル」と略称する)。両班的で農業的な地区と、庶民的で漁業的な地区の双方を抱え込んだ石浦は、そのような二重性を観察するのには最適の場所であった。

ただし、ブランドはそれほど理論家タイプではなく、最初からこのようなテーマを想定してフィールドに赴いたわけではない。本書で彼自身が明らかにしているように、もともとは親族やその他の集団に対する個人の忠誠と、それがどのように村の不和や葛藤に関係しているかを調査するという程度の計画で村に入った。最初は両班地区で親族を中心にした人間関係を観察していた。そのうち近隣の家で屋根を葺くのに、親族のみならず友人など五〇人ほどの様々な人々が駆けつけて来たのを見たことを一つのきっかけに、違う形態の人のつながりがあることを見いだしていったのである [Brandt 1971: 20-21]。

彼の枠組が現場の観察から見いだされたものだったとはいえ、このような本書の方向性は、明らかに当時の人類学の理論的動向と対話しながら形成されていた。マリノフスキーらの古典的な民族誌の調査法や叙述スタイルを基本にしながらも、本書では、静的な社会有機体論のない構造機能主義的な叙述から一歩抜け出た、より動態的な視点を好んで引用している。まず、ケンブリッジ大のリーチ (Edmund Leach) の『高地ビルマの政治体系』(一九五四年)「リーチ 一九八七」からは、旧来の実在的な「社会構造」概念から区別される「モデル」や「構造」といっ

た考え方を取り入れている。カチン民族が封建的・階層的な「シャン」と平等主義的な「グムラオ」という異なる政治理念をもっていることを論じたリーチの枠組は、ブランドの議論に少なからず取り入れられている。また、いわゆるマンチェスター学派もよく引用している。グラックマン (Max Gluckman) の『アフリカの慣習と葛藤』 [Gluckman 1955] は、紛争・矛盾・争いなどの社会的葛藤 (social conflict) に注目したことで知られるが、ブランドの著書では七章を中心として葛藤やその情況分析 (situational analysis) が一つのキーワードとなっている。ターナー (Victor Turner) の『儀礼の過程』 (一九六四年) 「ターナー 一九七六」は一見関係なさそうだが、儀礼の過程で見られる平等的な「コムニタス」と不平等な「構造」の対比はブランドの議論と関連している。ただしブランドは、日常生活においてよく見られるような平等主義的な倫理を論ずるためには、儀礼中の恍惚状態や革命的状况を想定したターナーのコムニタス論ないし反構造論があまりに激しすぎると批判もしている [Brandt 1971: 32]。

イギリス社会人類学だけではなく、米国人類学の農民研究 (peasant studies) からもある一定の影響が見られる。特にレッドフィールド (Robert Redfield) の『農民社会と文化』 [Redfield 1956] の農民文化論、すなわち学校・寺院等で意識的に培われる階層的な大伝統 (great tradition) と村落共同体で伝承される庶民的な小伝統 (little tradition) の議論は、ブランドの二重モデルと呼応している。ブランド自身は、レッドフィールドが小伝統をあまりに従属的に位置づけていること、両者の関係をはっきり論じていないことを批判していた [Brandt 1971: 33]。一方、「限られた良いもの」 (limited good) をめぐる農民の対応に関するフォスター (George Foster) の議論 [Foster 1965] については、彼のいう「極端な個人主義」がブランドの観察した農民の倫理と一致しないとして退けている [Brandt 1971: 75-76]。

なお、朝鮮社会の二重性という点でいえば、特に日本では、秋葉隆の二重組織論がしばしば参照されてきた。それは「伝統的な朝鮮の社会および文化は、大まかにいって、女性を中心とする巫覡的文化の運載者と、男性本位の儒教的文化の支持者との、二重組織に於て理解される」 [秋葉 一九五四・一五五] という一文に要約される。二重性を指摘した議論の相似性ゆえに、秋葉とブランドが並べて論じられることもある [伊藤 一九七七、一九八〇

ほか。しかしながらブランドが秋葉を参照した形跡はなく、インタビュー時には名前すら知らなかった。彼の二重モデルには秋葉のようにジェンダーによる二分法も見られない。むしろ沿岸の村落での実際の観察と上記のような理論的動向とが組み合わさってできあがったものにとらえるべきであろう。⁸⁾

こうした理論的含意と具体的な民族誌的叙述を含むブランドの著作は、英語圏では、人類学でも東アジア研究でも基本的に歓迎されたといつてよい。ブランド以前に米国から韓国(南朝鮮)に来て現地調査をした人類学的な著作としては、イェール大の人類学教授オスグッドによる著作「Osgood 1951」があるが、これは米軍政下の一九四七年夏に二人の助手を雇って江華島を調査したものであり、「人類学的なモノグラフというには物足りない」(「圭京秀 二〇〇四:二九〇」)とも評価されている。その後、フィールドワークに基づくまとまった英語によるモノグラフは、二〇年後の本書の登場を待たなければならなかった。⁹⁾ そのため人類学やアジア研究の学術誌で出された書評においても、「例外的な貢献」(アジア学会)、「学部および大学院の読書リストの大きなギャップを埋める」(アメリカ人類学会)といった賛辞が続いた。¹⁰⁾

一方、この本は韓国内においては数奇な運命を辿った。一九七五年、金瑄奉^{キムクワンボン}という政治学者の翻訳により時事問題研究所という出版社から韓国語版『韓國의村落』が出された「Brandt 1975」。同書は定価も付いており、「灯台の下」を新たな角度から照明」という見出しで新聞書評も載っている¹¹⁾ので、それなりの部数が販売されたものと思われる。だが、これはブランドに無許可で翻訳されたものであった。しかも石浦の実名が明かされてしまっていたため、彼は憤って強く非難した。その結果、出版は差し止められて在庫が回収され、相当額の補償金も支払われることになって、和解となった。彼はこの補償金を全て村の発展基金として寄付したという。

ブランドはこの韓国語訳について、伝聞情報と前置きしながらも、KCIA(韓国中央情報部)が関与していたらしいと語っていた。すなわち、ワシントンの韓国大使館にいたKCIAの元高官が英語版を手にし、政権の評判を回復するためにこの本を翻訳して広めようと提案したというのである。その真偽の程は不明である。だが、

李庸起の調査「이용기二〇一〇」によれば、まず韓国語版を印刷した光明印刷公社は五・一六の「革命公約」の印刷を担当して以来、政府お抱えの印刷会社だった。また、時事問題研究所からはこれ以外に刊行された図書がなく、一種の幽霊組織とも考えられる。加えて、漢陽大で政治学の教授だった翻訳者は、一九七〇年代末に中央情報部国際情報局（ヨーロッパ担当）局長であったという。そうした諸点から考えて、中央情報部の関与の可能性はあり得る話である。

先述のとおり、この翻訳が出た頃にブランドはセマウル運動の調査をユネスコから委嘱されていたことから、韓国政府は「維新体制」の政策の米国における理解者として彼を利用しようとしたとも考え得る。実際、金瑄奉は「訳者の言葉」で、「彼（ブランド）は朴正熙大統領の領導下で最近『近代化』という新しいイデオロギーが村落社会を伝統的な無気力と束縛から解放させており、経済的開発の促進と個人の創意力を増進させる結果をもたらしている」と指摘する」とか、「現在成功裏に推進されている農村セマウル運動の精神的な基礎が協同と自助にあるだけに、本書で指摘している韓国農村社会の伝統的協同と相互扶助はセマウル運動の理論的武装を一層確固なものにするのに大きな助けとなるであろう」との独自の解釈を提起している。この解釈はかなり恣意的な曲解にもとづくといわざるを得ないが、いずれにしてもこの本が出版差し止めになったことで、韓国政府の目論みは霧散することになった。

ブランドが本書を出して以来、一九七〇〜八〇年代にも論文を公表し続けていたのに、それほどその歩みが知られていなかったのは、彼が大学に定職を得なかったことに加え、主著が韓国社会とこのような不幸な出会い方をしてしまったことも少なからず影響を及ぼしたのではないかと考えられる。結果、本書は村落社会を研究しようとする者にとつては知る人ぞ知る業績となったものの、彼自身が韓国的一般読者のあいだではポピュラーな存在にはならなかった。

四 フィールドワークを歴史化する

以上を前提として、いよいよ『韓国の村落』の内幕を掘り下げる作業にとりかかる。以下まずは彼のフィールドワークを検証するための資料について整理し(1)、そのうえで三つの観点、すなわち彼の調査法(2)、現代韓国と米国の存在(3)、そしてフィールドへの参与と共感(4)という諸点から歴史化を試みたい。

1 検証のための素材

一九六六年の石浦調査を検証するための素材としては、冒頭で述べたようにフィールドノーツ、写真、回顧録の三種類がある。順に説明しよう。

まず、フィールドノーツは、ピーボディ博物館に寄贈された一五冊のノートと、国史編纂委員会で整理中の四九通の封筒に含まれたものがある。前者はブランド自身によって表紙に『Field Notes』といったタイトルのほか、1〜15の通し番号が振られている。全て石浦に関わるノートであると考えられるため、仮にこれをS01〜S15と記号化しておきたい。後者では石浦調査以外のノート(相当の割合が板子村の調査時)がほとんどであるが、通覧した限り、七冊の石浦関連のノートと一通の茶封筒が含まれている。これは国編が整理用の仮番号を付けているため、ここではその番号をとってK01、K02のように記号しておく。これらの内容は、およそ表1のように整理することができる。日付がはっきりしないものもあるが、その場合は前後から推定している。また、頁数はノート全体の枚数を意味するものではなく、ブランド(またはその調査協力者)がページの肩に通し番号を振っている箇所の数を意味する。

これら合計二二冊のノートと一通の封筒は、内容に従って次のように五つに分類することが可能である。

フィールドワークを歴史化する

表1 石浦調査のフィールドノート一覧

ID	頁数	記入時期、内容	区分
S01	12+58p	1966.4.5 ~ 5.4	①
S02	100p	1966.5.4 ~ 6.26	①
S03	118p	1966.6.27 ~ 8.6	①
S04	120p	1966.8.6 ~ 10.1	①
S05	92p	1966.10.1 ~ 10.25	①
S06	35p	1966.10.26 ~ 10.30	①
S07	36p	1966.10.31 ~ 11.6	①
S08	40p	1966.11.7 ~ 11.11	①
S09	48p	1966.11.12 ~ 12.10	①
S10	19p	1966.12.10 ~ 12.16	①
S11	67p	日付無し、メモ。	②
S12	31p	"Supplement MISC." と記載あり。筆跡の異なる頁を含む。	②
S13	記載無	日付無し、メモ。	②
S14	記載無	表紙に "Theoretical Speculation" と記載あり。	②
S15	154p	1991.9.26 ~ 1991.12.11。表紙に「Field Notes for "Reencounter"」と記載あり。	⑤
K01	29p	1969.6.25 ~ 7.1。表紙に "Uihang 1969" と記載あり。	④
K02	記載無	1965.12.27 ~ 12.29。表紙に 'Diary' と記載あり	①
K06	29p	表紙に 'RFD#3' のナンバリング、本文中に 1972 年の日付あり。中身は筆跡の異なる韓国語。	④
K24	記載無	日付無し、手帳へのメモ。	②
K25	記載無	日付無し、手帳へのメモ。	②
K26	記載無	日付無し、手帳へのメモ。	②
K27	記載無	日付無し、手帳へのメモ。	②
K34	封筒	"Supplementary material", "maps", "most of data" 等の記載あり。	③

- ① S01 ~ S10、K02 (一冊) : メインのフィールドノートである。日記形式で整理された記述が中心を成している。K02 は一九六五年末の石浦への予備調査時のものと考えられ、残りは一九六六年の日記である。
- ② S11 ~ S14、K24 ~ K27 (八冊) : 日付や頁数が体系的に入っておらず、その都度記されたメモと考えられる。内容から、一九六六年の石浦調査時に作成されたものと考えられる。
- ③ K34 (封筒一通) : 様々な資料が入られているが、なかでも手書きの二枚の地図、質問紙調査の集計表が重要である。
- ④ K01、K06 (二冊) : 博論執筆後に何らかの目的で石浦を再訪するなどして作成されたものと思われる。
- ⑤ S15 (一冊) : 「再会」のためのフィールド

表2 フィールド写真コレクション

大区分	小区分	ファイル番号	枚数	色	内容推定	備考
A	1	0001～0021	80	カラー	1991年石浦再訪時	
A	2	0022～0102	296	モノクロ	1966年石浦調査時	別の写真を含む
A	3	0103～0113	43	カラー	1966年石浦調査時	
B	1	0001～0002	2	モノクロ	国際会議出席時	
B	2	0003～0019	68	モノクロ	板子村調査	
B	3	0020～0029	40	モノクロ	不明(旅行写真等)	
C	1	0001～0006	24	モノクロ	「公州」との分類名	
C	2	0001～0015	60	両方	「利川」との分類名	
C	3	0001～0011	44	両方	「丹陽」との分類名	
C	4	0001～0016	64	カラー	「莞島」との分類名	
C	5	0001～0011	44	カラー	「済州」との分類名	
C	6	0001～0005	20	カラー	「分類無し」との分類名	韓国大使館時代の写真と推定される

ルドノーツ」と表紙に記されている。一九九一年に石浦を再訪し、比較的長期に滞在した時の日記であると考えられる。

この他に日付は不明ながら、村を去った人のことなどをまとめた内容を含むノート(No.6)もあるほか、違うノートのなかに混在しているものもあると考えられる。いずれにしても①③が一九六六年のフィールドワーク当時に作成された資料と推定される。

次に写真である。写真には残念ながらほとんどキャプションがない。国編は既にこれを分類整理し、明らかなプライベート写真を除いた七八五枚分についてスキャン作業を終えている。まず国編がこれを元の封筒の区分を手がかりに大きく三つに分けてあるので、それぞれにA～Cの記号をふり(大区分)、さらに内容にしたがって枝番号(小区分)をふって整理したものが表2である。Cは国編側が封筒への表記を手がかりに六つに分類してあり、A・Bは内容のまとまりにしたがって私が写真を小区分した。「ファイル番号」はスキャンした写真のファイル名であり、実際にはさらに枝番号がついている。石浦の写真と考えられるAが最も多く、四一九枚分ある。その一部は回顧録韓国語版「Brandt 2011」に掲載されている。B～2の六八枚は板子村調査の時のものと考えられる。残りのものはいっ撮ったか現時点では不明であり、ブラントに確認を依頼したいと考えている。また、石浦の写真については、現

表3 *Affair with Korea* の目次

章	英文	日本語試訳
	Prologue	プロローグ
I	Sokp'o (1965)	石浦 1965 年
II	Settling In 1	入り込む、その 1
III	Patriotic Journey	愛国の旅
IV	Settling In 2	入り込む、その 2
V	Getting Involved	巻き込まれる
VI	Getting There	あそこへ行く
VII	Fathers and Sons	父親たち、息子たち
VIII	Spirits: Familiar, Benign & Malevolent	靈魂：親密な、善良な、邪悪な
IX	Fishing 1	漁、その 1
X	The Anthropologist at Work and Play	仕事する人類学者、遊ぶ人類学者
XI	Contraband	密売
XII	Fishing 2	漁、その 2
XIII	Go Peacefully; Stay Peacefully	どうか安寧に
XIV	Reencounter	再会

地の人々から写っている人や場所を特定していただくこうと考えている。

最後が回顧録である。一九九一年、ブランドは韓国国際交流財団 (Korea Foundation) の前身である ICSK (International Cultural Society of Korea) から助成金をうけ、石浦を約三ヶ月にわたって再訪した。回顧録では一貫して再訪年を一九九二年だと記しているが、フィールドノート S15 や写真 A-1 の日付からしても、これは一九九一年の誤りだと思われる。回顧録はこの再訪をきっかけとして記されたものであり、既に述べたように、当初は米国の出版社から出版する予定であった。本文はプロローグと一四章の本文から構成される(表 3)。二〇一一年の韓国語版は一九九四年の日付のついたタイプ原稿をそのまま訳したものであり、本人のチェックや校正などを経たものではない。二〇一二年一月に私がブランドを訪問した時には、ワシントン大学出版局からの出版の話が進んでいるとの話を聞いた¹²。出版社からとつぜん連絡があったとのことで、韓国語版の刊行がきっかけになったのかもしれないが、理由は不明だと言っていた。英語版が公刊されれば、それが底本となるべきだと思われるが、本稿では重訳を避けるために未刊行の英文タイプ原稿を底本とし、頁数を示す必要がある際には公表された韓国語版(これも非売品だが)の頁数を◇に入れて表記するという、変則的な次善の策をとる。

回顧録は事後的に過去を振り返るため、「書かれた現在」のバイアスを排除しきれない。ブランドの回顧録の場合、「書かれた現在」の主観的な思いを隠さず、むしろさらけ出している。回顧録は二五年ぶりにフィールドを訪れたことを述べるプロローグから始まり、一〜三章で一九六六年の調査時を回想し、最後の十四章で再び二五年後の「現在」の石浦の様子を描いている。再訪時の語りの基調を一言で要約するならば「ノスタルジア」である。去った人々、変貌した風景、経済に熱中し「人心」を語らなくなった人々、かつての価値観が崩壊した穴埋めのように広がるキリスト教、誰もマツコリに誘ってくれない寂しさ、そうした思いが一章で綴られている。そこから、民族誌においては語り切れなかった一九六六年の歴史的「現在」の経験の復元が進められたのである。ただ、回顧録はただ記憶だけを頼りに書いたものではない。随所でフィールドノーツから日記が引用されており、一定の客観性を担保している。民族誌を補完し、場合によっては相対化もし得るもう一つのテキストとして位置づけることができよう。

この他に、顔写真付きの個人情報カード、フィールドノーツの索引があったことが分かるが〈4〉、未見である。以下、本稿では主として回顧録をもとにフィールドワークを辿りなおす。フィールドノーツと写真の分析は別の機会に譲りたい。

2 フィールドワークの方法

ブランドの回顧録の面白さの一つは、どのようにフィールドワークをおこなったのかについて、失敗の経験を含めて、率直に書き記している点である。

まず、黄海（西海）の海岸がフィールドに選定された理由については、「農民と漁民の経験や性格を比較対照する」というアカデミックな動機もあったが、「海、海岸の景色、船、魚介類が好き」〈13〉という個人的動機があったことも告白している。船は彼の生涯の趣味ともいえるものであり、それが動機になったのは十分納得がいく。石

浦の選定経緯については、まず初めて忠清南道に下るに際して、米大使館勤務時代の友人であり韓国で長官も務めた経験のある二人の「強力なエスコート」で行ったこと、瑞山郡守から地域事情のブリーフィングを受けたことなど、外交官時代の人脈が活用された事実も記している。郡守から紹介してもらって茅項まで行き、その後歩いて見つけたのが石浦であった。それが一九六五年末のことであり、一度ソウルに戻った後、一九六六年三月から本格的なフィールドワークを始め、一九六七年一月まで住むことになった。孤立した地域を選んだのは、「相対的に伝統的なコミュニティを見ることができよう」との期待をもつてのことだった（14）。

ブランドは二人の対照的な人物をキー・インフォーマントとしていた。一人は村で唯一の国民学校教諭だった李炳基（以下「李先生」）である。李先生は両班地区の全州李氏家門であり、ブランドは石浦への定着初期に彼の舎廊房（客間兼書齋）に住んでいた。ブランドが事あるたびに村のさまざまな事象の解説を仰いだ人物であった。もう一人は金泰模（キムテモ）という一〇代の若者であり、学歴は書堂と国民学校のみだったにもかかわらず、李先生の認める人物だった。二人は同様に儒教的な倫理を持ち合わせていたが、対照的な存在であった。李先生は博識だが、調和と協力の理想化された像で石浦を語りがちなため、争いごと・泥棒・姦通などについてはよいインフォーマントではなかった。一方、泰模はシステムの不正さ、貧困や土地無しの人々への差別を感じており、批判的視点からなぜこんなことが起きるのかについての説明がうまく、スキャンダルについてもよく話してくれた。ブランドは、こうした対照的な二人の意見について「有益な交唱 antiphony」と呼び、「私は一方が語った多くのことについて他方の異なる見解をチェックする習慣がつきはじめた」と回想している（40）。

家族や家についても回顧録では記している（四章）。調査当初は、妻と四歳・二歳・〇歳の子が、両親・二姉妹・一兄弟とともにソウルにいた。回顧録には記されていないが、妻は米軍関連の仕事をしてたと聞いている。このうち四歳の娘、二歳の息子、妻の妹であるヒヨン（정희영）が石浦に来ることになった。ブランド自身も農業中心の両班地区から漁業中心の大村に拠点を移す必要性を感じていたこともあり、土地を購入して家を建てるこ

とにした。材料も人材も村で調達したため、予算は三〇〇ドルほどで済んだ。六月には家が建ち、二人の子、ヒヨン、そして家政婦のキョンスク(君幸)が石浦にやってくることになった。ヒヨンは梨花大を卒業したばかりで、すぐ後に述べるように、調査助手として手伝ってもらった。キョンスクは、洗濯の時などに井戸端会議でさまざまな噂を聞いてくることもあった。『韓国の村落』が出版された当時、調査における家族の役割が明らかにされていないことに不満を表明した書評もあったが、これはそのことに對する一定の回答となつてゐる。

石浦における二つの觀念体系のモデルについて、回想録では、大村での人間關係を見ながら、両班地区との對比において考えられたことが述べられている。曰く、両班地区の全州李氏が儒教的倫理スペクトルの最も強い側だとすれば、大村の姜氏はそれと對極の側にあつた。姜氏の家は村で最も人氣のあるチョムジエン占い師であつた。この点からブランドは次のように論じた。

ここには基本的な不一致があるように思われた。もし礼儀作法や自己抑制が人々の評判を決める重要な要素だとするならば、なぜ姜氏は人氣があつて、村の生活によく溶け込んでゐるのか。結局私は、よりインフォーマルで、平等主義的で、個人主義的なもう一つの価値の体系が作動してゐるに違ひないと考えることにした。適切な振る舞い、階層、出自のプライドなどの代わりに、この語られないが深く内面化された規範は、氣前の良さ、おおらかさ、個人的な魅力、自己表現、リスクへの積極性を強調してゐた。この個人的で感情的な性格はシャーマニズムと親密に結びついていた(112)。

シャーマニズムや占いなどが『韓国の村落』でほとんど扱われていなかったにもかかわらず、二重モデルの系列で挙げられていたには、このような経緯があつた。

彼が石浦に持ち込んでいた米国の物質文化が、参与觀察を有利に導いたことについても彼は明かしている。一

つは自宅の舎廊房において、インスタント・コーヒーやウイスキーを振るまいはじめたことである。この村には茶房タバシ「喫茶店」が無かったこともあり、無料の飲み物を求めているいろいろな人がやってくることになった。曰く、「私は偶然にも、新たな形態の「共感的参与観察」の方法に出会ったのだ。私自身の西洋化された舎廊房だ」(79)。もう一つは医薬品である。大学で旅行者コースを学んだブランドは、大量の薬入りの医療キットを持ち込んでおり、村人にしばしば治療行為を施していた。これがベランダのコーヒー以上に村人との関係形成に役立ったと述べている。米国の文化的ヘゲモニーは、現地調査のなかでも作動していたのである。

このような自己流の調査スタイルを確立した一方で、ブランドはオーソドックスな調査法がしばしば役に立たなかったことを述べている。まずやり玉に挙げられているのは、イギリスの社会人類学者が作成した調査ガイドである。具体的には明記されていないが、英王立人類学協会の調査マニュアル [Royal Anthropological Institution 1951] のようなものを指しているであろう。ブランドはこう述べる。

だが、こうしたガイドはあまり役に立たなかった。私は、米軍の優れた地図を既に持っていた。それは朝鮮戦争時の航空写真にもとづくもので、全ての家、道、田んぼ、森林が等高線とともに書き込まれていた。それに朝鮮語の文法や音素体系は、イングランドがようやく暗黒時代から抜け出たような頃から、卓越した言語学者によって科学的に分析されてきた。出自や親族組織は石浦のほとんど全ての年配の男性のマニアックな関心事になっており、それ以外のことを話すのが難しいぐらいであった(76)。

長い文字社会としての歴史をもつ朝鮮半島においては、人類学者があらためて文書化せずとも多くのものが既に記録され、分析の対象になってきた。米軍の地図については、インタビューの際に、ソウルの妻を經由して入手したと語っていた。

もう一つ、自己反省もこめて批判的に取り挙げているのは質問紙調査である。博論に際しては「ハード」なデータも要求されたため、収入、財産、負債、乳幼児死亡率、相続、再婚・妾、養子その他の個人情報調べる調査票を、ソウル滞在時に一一〇枚印刷していた。ヒョンを研究助手とし、洗濯石鹼を手土産に調査を進めた。ところが調査データをクロスチェックしてみたところ、多くの情報^がでたらめだということが分かった。これについて李先生に解説を求めたところ、次のような説明があつた（82）。

古くからつらい経験をしてきた教訓から、村人は知らない人に対して口を閉ざすようになっていゝ。とりわけ金銭や政治に関わることについてはそうだ。何千年ものあいだ韓国の農民は徴税官や警察その他の寄生官吏に抑圧され搾取されてきたから、秘密にすることを生き残る戦術として身につけており、外部の人には可能な限り軽く嘘をついて流すようになっていゝ。

植民地期や米軍政期を含めてさまざまな「調査」にさらされてきた民衆は、調査票を片手にやってきた外部者に対し、「こいつは何を聞きたいのか」「これで面倒なことに巻き込まれないか」を気にするといふのである。結果、回答内容はほとんど使えなかつたが、調査を口実に多くの人をつかまえて話すきっかけにはなつたと評価してゐる。いづれにしても今日、近現代の諸統計を使う研究者は、こうした諸点を常に考慮に入れておくべきであらう。

関連して、「進歩」に対する農民の態度について、当時、韓国の官僚や米国大使館筋、世界銀行担当者などが抱いていた先入観、すなわち韓国農民は保守的であり、停滞的な生活から引つ張り出す必要があるという考え方や、そうした認識にもとづく調査も批判してゐる。曰く、「日々生きてゐる農民や漁民に対して、一万マイルも離れた都市に住む中産階級の知識人がつくつた仮説にもとづく標準的な質問のセットをぶつけても、意味をなさないのだ」（84）。農民が保守的だといふのは間違いで、土地や資本がそもそも不足し、金持ちでもない限りリス

クを負いきれないのに加え、低い農産物価格と高い肥料等の価格もあって、新たな事業などが展開できないのだというのがブランドの結論であった。

そうした調査に比べると、ブランドのフィールドワークはかなりインフォーマルなものである。一〇章に典型的な一日の事例が紹介されている。昼から人々の集まる酒幕ヂュムラクに行ったり、人につかまってまた飲んだりなど、計画的に進まず、体も人にも「二日酔い」になり、翌日には人にも会いたくなくて舟に乗って海に出る、といった調子である。こうしたフィールドワークの点まで含めて率直に記しているのが回顧録の興味深い点である。都市エスノグラフィの古典『ストリート・コーナー・ソサエティ』〔ホワイト 二〇〇〇〕においては、フィールドワークの裏面を描いた附録が本論に匹敵する重要な価値を有しているが、ブランドの回顧録はそれに相当する内容を含んでいるといえる。

3 分断国家と米国の存在

フィールドワークを歴史化するという点において重要なのは、調査者と調査対象との関係を規定する政治経済的な状況である。特に南北分断とそのなかでの米国の存在が、さまざまな形でフィールドワークに影響を及ぼしていたと考えられる。『韓国の村落』においても多少言及はされていたが、回顧録では、そのような歴史的「現在」をそれなりの分量で描写している。

まず、ブランドにとって韓国の村が異文化であったと同時に、村の人にとっても彼の存在は異物であった。はじめに石浦に行ったとき、人々は彼について、米国のスパイかK C I Aのエージェントで、村にいたら北朝鮮の攻撃を誘発するかもしれないとか、金か石油を探しにやってきたに違いない、といった「理論」を噂していたという（23）。また、どこへ行っても、彼自身が好奇心の対象となっていた。一晚泊してもらった家では、女性たちに配偶者のことで質問攻めにあった。韓国人の妻は現地妻だろう、アメリカ人の妻はどこにいるのだ、宣教師

でもなければ現地妻を娶ることぐらい知っている、恥ずかしがることはない、この村にも妾がいるんだから、云々（61・62）。当時、韓国の女性から外国人がどのように思われているかを垣間見ることのできる話である。

敵意に近いまなざしが向けられたこともある。ブランチはソウルの家族に会うために、一度だけ船に便乗して仁川に渡り、そこから陸路で向かったことがあった。その途中の海上でエンジンが故障で停止した。船は波に乗ってどんどん北上していった。

「もしこのまま流されたら、わたしらは北朝鮮の人にスパイ船と間違われて捕まるのではないか」と誰かが口にした。深刻なやりとりが続いた後、米国人と一緒に乗っていたらみんな撃たれるに違いないという話になった。二人の女性は、真剣な敵意をもって横目で私を見た（179）。

一時間で修理できたため、これは一時の出来事で終わったが、分断体制下の緊張感を物語っている。

分断状況と米国の存在という点についていえば、特に二つのエピソードが注目される。一つは米軍基地まで行ってきた時のことである（三章）。ブランチは毎食、米で歓待されており、焼きたてのパンが食べたくなった。当時、米国の「平和のための食糧」(Food for Peace)プログラムによる小麦粉が韓国農村にあふれており、労働の対価としてよく支給されていたが、通常は闇市場に流されるか、麺やマッコリに加工されていた。彼はそれでパンを焼こうと考え、焼き方を習うために、村の人が「二〇里」ほど離れた所にあると言っていた米軍ミサイル基地まで六時間かけて歩いて行った（正確な位置は不明）。ここではステーキ、豆、ベイクドポテト、パイ、アイスクリーム、コーヒー等でもてなされ、イースト等も入手した。

その後、米兵に連れてもらって行った基地村（三〇）の様子はかなり詳しく描かれている。この基地村はバー、ダンスホール、売春宿などからなる遊樂街で、昼は韓国人に喫茶店・レストランをさせていた。夜になると一般

の韓国人が立ち入り禁止となり、二五〇名の米国人を一七〇名の若い韓国人女性がローテーションで相手をしてきた。ある米兵の表現を借りれば、基地村は「巨大な、よく組織化されたデート事務所」〈53〉のようなものであった。米兵のインフォーマントによれば、この女性たちは稼いだ金で自分の弟を大学に送ったり、朝鮮戦争で全てを失った両親を支えたりしていた。女性は定期的に検査され、「結婚の数は可能な限り少なく抑えるよう努力」していた〈53〉。

基地村において、米兵は韓国人に対する差別意識を露骨に表現していた。女性のいる前でも、韓国のことを「救いようのない地獄」(Godforsaken hellhole) などと言ったり、「文化も文明もない」とか「やつらは怠け者で信用ならない」などと平気で語っていた。

それは奇妙なことだった。ここで知り合った人にとって、韓国人一般は、すなわち抽象的な韓国人や直接会ったことのない韓国人は、軽蔑にも値しない存在だった。一九四五年以来受け継がれ、朝鮮戦争によって増幅された軍隊内の伝承では、韓国人(特に韓国人男性)は怠惰でいい加減な存在ということになっていた。ところが、かれらがよく知る韓国人や毎日のように一緒に働く(あるいは遊ぶ)韓国人は、アメリカ人と近さによってイメージが変容し、どこか違ったものとされていた〈56〉。

こうした、米軍基地コミュニティにおけるアジア人へのレイシズムとセクシズムは、冷戦期のアジア各地で報告されている『Moon 1997: 33-34』。ところが基地村の女性たちは、こうした米兵の韓国蔑視を何とも思っていないわけではなかった。ブランドがある女性に韓国語でどう思っているか尋ねたところ、憤りと不満を吐露しはじめ、間もなく周りの女性たちも加わって爆発しはじめた。「あいつらは私らがどう感じているかなんか気にしていない」「米国は何でも最高だと思ひ込んで」「この人たちは人心が^{イシム}ない」といった調子である。基地村の女性

たちがどのような思いを抱き、どのような生を送ってきたかについては金蓮子「二〇二二」の本が生々しく伝えられているが、この回顧録はその声のほんの一部を拾うとともに、米兵側の意識も合わせて伝えてある点で興味深い。もう一つのエピソードは、仁川ではからずも「密売」に関与することになったことである（二一章）。先に述べた仁川に船で行ったときのことである。当時、村の人が現金収入を得るために豚をつぶして売ろうと思っても、正規のルートでは輸送、屠殺、卸売、検査、食肉証明などで中間搾取を受け、農民の手元に利益が残らなかった。そこで村人と仁川の食堂は、中間マージンを避けてこっそりと直接取引することで、相互に利益を得ることがあった。村人の文氏はその「密売」にブランドを利用してしようとした。彼はそのようなことがおこなわれているとは知らず、仁川で酒と一緒に飲んでいたところ、もう夜間外出禁止令の時間までにソウルに戻れないほど遅くなった。そこで文氏らとタクシーに同乗しオリンパス・ホテルに向かうことになった。ところが何度も食堂の脇に止まっては、出てきた人に木箱を渡し封筒を受け取っていた。同乗者は心配するタクシー運転手に、オリンパス・ホテルに向かう米国人には警察は干渉できないから安心しろと言いながら札束を持たせた。そのうち二人の警官がタクシーに近づいてきた。

誰かが後ろから私をついたので、私はすなおに窓を開け、オリンパス・ホテルに行つてギャンブルで夜を明かしたいだけだと、教科書にある型どおりの韓国語で説明しはじめた。韓国語を喋ったのは戦術として間違っていたことに気づいた。同乗者は後部座席でうめき、さらに私をついた。かれらとしては私に、典型的な休暇中のG Iのように振る舞ってほしかったのだ。一九六〇年代に韓国語を喋る外国人は宣教師ぐらいたったが、私は明らかに宣教師っぽくなかったため、警察官の不信感が増大した（186）。

最終的には、事情を説明し、袖の下を支払つてこの場は通り過ぎた。翌朝、文氏がソウルまでタクシーで送つ

たといふので、賄賂等を含めてももうかるということは、逆にどれほど中間搾取がひどかったかをうかがい知ることが出来る。要するに、村人が米国人のもつ特権的な地位を認識し、法規制の網の目をくぐるために、それを利用したのである。事情を知ったブランドは怒るところか感嘆した。

私が石浦の人々で敬服すべきことはいろいろあった。その一つは、かれらがシステムに打ち勝ち貧困を緩和させようと、乏しい資源を最大限活用しようとする際にみせる、頑強で、ユーモアあふれ、弾力性をもち想像力にとんだやり方だった。どんなものも無駄にはしなかった。この場合でいえば、あやしげな外国の人類学者の価値でさえもである。(188)

生存経済ラインの近くで生きる人々が、村に住む米国人ですら「資源」として活用しながら生きていた様子を、ここからうかがい知ることができよう。

4 参与と共感

ブランドは自らの方法を「共感的参与観察」(sympathetic participant observation)と称している。最後に、この「参与」と「共感」のあり方について検討しておきたい。

ブランドが石浦で過ごすなかで、観察のための参与といった次元をこえ、村のあり方にはつきりと介入したことがあった(二二章)。近隣の千里浦チヨルリガに行った時に、石浦よりも経済的にうまくやっているのを見た彼は、石浦との違いについて千里浦の漁民に意見を乞うた。千里浦の人々による軽蔑の混ざった評価を聞きながら、それまで貧困のなかで生きる石浦の「人心」に共感を覚えていた彼も、不平・嫉妬・憤りとともに石浦の経済への心配が大きくなった。ちょうどその頃、彼はワシントン時代の友人で当時財団を運営していた「デヴィッド」に偶然出会っ

た。私がインタビューで確認したところによれば、この人物は、当時アジア財団 (Asia Foundation) の韓国担当ディレクターだったステインバーグ (David Steinberg) (現・ジョージタウン大学教授) である。ステインバーグは、ブラントに年度予算の残り数千ドルを自由に使ってよいと言った。ブラントは石浦の開発基金を立ち上げ、里長イジャン (名誉職の村代表) および有志ユジン (地域有力者) からなる評議会で運営することを思いついた。初期には五名の漁民の漁船への投資に対して通常の利率よりも安く千ドルずつ融資する、その基金が蓄積してきたら評議会のもとでさらなる開発プロジェクトを実施する、という計画であった。大学院の開発教育で、開発事業を成功させるために人々の協力やコミュニティのための非利己的献身が重要だと学んでいた彼は、石浦の人たちの伝統的な倫理がそうした共同的理念と合致しており、新たな事業運営でも機能すると見込んだ。

しかしながら、この仮定は全くの誤りであった。評議会によって選ばれた融資対象はみな有志の親戚筋ばかりで、誰一人として事業が成功に結びつかなかった。一人はそもそも船を買わず、一人は仁川に行ったきり帰らず、一人はリスクの高い仕事で失敗して船を売るはめに陥った。もう一人は酒にひたって息子と喧嘩したあげく、息子が船を売って別の小舟を買って漁をすることになった。最後の一人はしっかりと漁をしていたが、一月の嵐で遭難し死去してしまった。ほとんどマザーグースの怖い歌のような展開に、ブラントは「結局のところ、私の開発プロジェクトは村の経済的利益になるどころか損害をもたらしたと言わざるをえない」²⁰⁸と否定的に自己評価するほかなかった。

だが皮肉なことに、この開発プロジェクトは意外な結果をもたらした。石浦にブラントの貢献を讃える「功績記念碑」が建てられたのである。石浦には今もこの石碑が建っているが、その裏面には彼の「功績」が次の三点に渡って記されている。

1. 一九六六・七 石浦分校の近隣マウル (二〇戸) の飲み水不足を解消するために井戸一カ所を設置するのを

積極後援し、竣工にまでいたったこと。

2. 一九六六・八 当里のおくれた漁業と地域社会の発展のために米国のアジア財団から開発基金としてウォン貨五四万ウォンを幹旋、動力船五隻を購入するようにし、当里の自助勤労事業促進のために物心両面で後援することによって、全住民に唯一の希望と開拓精神を吹き込んだこと。

3. 一九六・一〇 農漁村開発に必要なマウル文庫を設置するよう後援したこと。

三つの功績が列挙されているが、やはり規模からしても開発基金が重視されていると思われる。石碑の除幕式は郡守まで参列して盛大にとりおこなわれた。石碑の日付は一九六六年一月三日となっているので、まだ惨憺たる結果が出る前に建てられたようである。いずれにしても、失敗したプロジェクトの石碑が建っていることは彼にとって居心地の悪いことであった。「この居心地の悪さは、石碑がニューイングランドの昔の墓石によく似ていたという事実によって強められた」(208)。

このような地域の経済発展に対する思いとは裏腹に、帰国後のブランドの博士論文は、むしろ「伝統的」な人間関係を描き出すことに重点を置いた。この点については意図的な選択であったことが明かされている。

一九六六年には、重要な経済的、世代的、心理的な変化が起きつつあった。私は博論を書くに際して明確な選択をしなければならなかった。かつての価値や習慣の衰退、新たな考え方や行動様式に適應するための村人たちの苦闘に焦点を絞るのか、それとも遠い過去に淵源する生活様式を幸いにもしっかりと見ることのできた者としての利点を生かすのか。将来的に、韓国についてのあらゆる人類学的な調査研究は変化や適應を主に扱うことになるだろう。進歩を研究する時間はたっぷりある。だとすれば、今は韓国の前近代の遺産と、それがもつコミュニティや社会的調和への圧倒的な関心に焦点を絞った(213)。

上記引用の前者の様相、すなわち村の「近代化」にともなう変化は、博論を単行本にする過程で追加された序章と最終章等で示唆されてはいた [Brandt 1971: 15-18, 236-237]。トランジスタ・ラジオや交通の発達の影響、徴兵の文化的影響、世代差、達成を目指して離村する人々などが言及され、二つの観念体系モデルが当てはまらない「新たな近代化の観念体系」としても位置づけられている。だが、まだそうした変化は始まったばかりだとして大きくは扱われていなかった。

彼の「共感」が、経済的利益に熱心で個人主義的な性向ではなく、共同的なもの、人々を結束し連帯 (solidarity) へと向かわせるもの、モラル・エコノミー的なものに寄せられていたのは明らかである。「一九六七年一月に去る頃には、村は一つの調査地以上のものでなっていた。それは一種の心の故郷になつていたので」(4)と語る彼にとって、一九九一年の石浦再訪時の変化は、新たな「カルチャーショック」(243)となつて立ち現れた。とりわけ共同的なものが見えなくなつていることを、彼は喪失感とともに語った。「私がコミュニティについて学んだのが、まさに一九六六年の石浦の村人からだったのに、いまや集団的な関心を抱いているのがどうやら私だけであることを、小さな衝撃とともに気づいた」(245)。これを「失われゆくもの」を嘆く老人類学者のノスタルジアとして位置づけるのは容易だし、おそらく妥当でもあるだろう。しかし、人々を結束へと向かわせる共同性がどう構築されるのかという問いが今日無意味なものになつたとも思えない。集団主義から個人主義へという単純な移行論ではない社会変化のあり方を考えるためにも、ブランドのテキストの読解は一定の意義をもつと考える。

五 おわりに——今後の課題

ブランドの研究を歴史的に辿りなおし、まず外形的事実からいえることは彼の主要なキャリアが冷戦時代と重

なっていたことである。外交官から研究者への道、その研究を支えていた資金のあり方、韓国における米国の存在などは、間違いなく冷戦の産物であった。と同時に、彼の歩みや書き残したテキストは、その枠組に収まりきるものではない。伝統的な社会に焦点を合わせ体系的に叙述された民族誌と、落ち穂拾いのインフォーマルさと断片性とを有しながらも、民族誌から除外された一九六六年の経験を一人称で叙述した回顧録とは、相互に補完的なテキストとなっている。どちらか一方が真実なのではなく、いずれもリアリティの一端をとらえている。だからこそ合わせて読めば、過渡期の韓国社会の周辺部の揺れ動く様相が浮かび上がってくる。特に人類学者の非エリート／非都市／非文字の志向性もあって、史料の残りにくい領域を描いており、貴重な現代史の資料となっている。もちろんそこには調査者の立場性や主観性が常に介在するが、その点を勘案しながら読みなおすだけの価値がある。

最後に今後の課題について述べておきたい。まず、本稿を前提としながら、一九六六年頃の韓国の村落社会を描き出すことが何といつても重要である。その際には、いうまでもなく様々な関係資料と付き合わせながら、民族誌を読みなおす作業が中心となる。特に関係資料としては、今回十分に利用できなかったフィールドノートと写真を分析することが重要な課題である。その都度作成された資料を用いることで、事後的にまとめられた民族誌と回顧録の双方を相対化し得る可能性がある。ノートは癖のある筆記体で記されているので、解読にやや困難さは伴う。とはいえ、多くは現場で書かれたメモではなく、随時まとめられた日記形式であるため、第三者でも読めるようになっていいる。石浦で再調査をし、必要に応じてプラントに確認するとともに、同時代の他の資料と付き合わせることで、さらに歴史的「現在」に接近することができると考えられる。

それだけではない。石浦の研究と板子村研究とをつなげて見る視点が必要である。プラントは『韓国の村落』でも都市に引き寄せられて離村していく人々の様子に言及していた。急速な都市化によって人があふれかえっていたソウルにおいて、板子村は都市への移住者がやむを得ず腰を落着けた場所の一つであった。その意味で板

子村研究は石浦での調査の後続研究とも位置づけられるものであった。実際、彼がこの主題で公表した論文のタイトルが「ソウルの貧民街と離農民」[Brandt 1973a]であったことから、彼自身、変貌する村落社会研究とスラム研究とを一連のものとして構想していた。「近代化」の波に乗り遅れた地方の研究と、巨大都市ソウルのスラムである板子村の研究とを合わせて検討することは、朴正熙政権下の韓国の「近代化」「都市化」の経験を周知ないし底辺から描き直す可能性を有している。都市と農村とを切り離さず、共に視野に入れた「下」からの社会史の構築のために、ブランドの残した膨大な記録は豊富な素材を提供している。

注

(1) 「靈泉역 사스촌의 美國人」[스타] 『선데이서울』一九六九年七月六日号。

(2) 当時、研究助手をしていた權彝九と崔協はその後、人類学者として活躍した。また、崔協は近年になってこの時の研究素材を出版した[최협 2012]。

(3) 「새마을, 유네스코研究事業확정」 『경향신문』一九七五年三月二三日。

(4) 「招待席」美하머드大東亞研 브란트博士 『경향신문』一九七七年二月一九日。

(5) この会議内容や発言の一部は当時報道された。「高大개교 80주기념」 『亞研』의 「2千年의 한국」 학술회의 『동아일보』一九八五年六月三日。

(6) ウォーラーズテインは、米国を中心とした地域研究が第二次世界大戦の「敵国」研究および冷戦の産物であったと述べたうえで、さまざまな分野の研究者が一つの地域を研究するという旗印のもとに集まった結果、その「意図せざる帰結」として、社会科学の垣根の人為性を露呈させ、学問の再編を促したと論じた (Wallerstein 1997)。

(7) この三つの小集落名は、私が調査したところによれば、それぞれコンノマル(컨노말)、クンマル(쿤말)、チェノモマル(재너머말)と呼ばれていた。本稿ではブランドの表現を使うことにする。

(8) 韓国の研究としては、村落社会を現地調査した李萬甲や金宅圭らの著作が積極的に参照されている[이만갑 一九六〇, 김택규 一九六四]。特に李萬甲との親交は深く、近年まで年賀状のやりとりが続いていた。

(9) ただし、ブランドと同時期にビエナツキ (William Biernatzki) が現地調査にもつぎ親族に注目した博論 “Varieties of Korean Lineage Structure” を提出してgoneが (Saint Louis University, 1967) 公刊されておらず、ほとんど知られてもいない。

- (10) 次のような書評があった。Eugene I. Krenz in *The Journal of Asian Studies*, 32(1): 163-165, 1972. Yunshik Chang in *Pacific Affairs*, 45(3): 437-438, 1972. Harry M. Lindquist in *American Anthropologist*, 75(4): 974-975, 1973. Frederick Hung in *The Geographical Journal*, 140(3): 482-483, 1974. W. E. Skilleud in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 37(2): 496, 1974.
- (11) 「[의심]의 세角度서 照明」『한민족학』一九七六年二月二四日。
- (12) Center for Korea Studies, University of Washington での *An Affair with Korea* のタイトルで二〇一三年二月に出版が予定されている。
- (13) 前掲 Skilleud 書評。
- (14) ただし、『韓国の村落』においても質問紙調査の結果をいくつか掲載している。その図表の利用にあたっては注意が必要だということが分かる。

参考文献

【韓国語】(가나다順)

김택규

一九六四 『同族部落의 生活構造研究——班村文化 調査報告』靑丘大學出版部。

이만갑

一九六〇 『韓國農村의 社會構造——京畿道六個村落의 社會學的研究』韓國研究圖書館。

이용기

二〇一〇 「빈센트 브란트 박사의 한자 연구 자료 수집 및 해제」二〇一〇년도 국사편찬위원회 국외 사료 조사 및 해제 지원 사업 최종보고서, 二〇一〇年一月三〇日付(内部資料)。

최협

二〇一二 『관자촌 일기——창계천 二〇년 전』눈빛。

【日本語】(五十音順)

秋葉 隆

一九五四 『朝鮮民俗誌』六三書院。

板垣竜太

二〇二一 「現代史——社会史・文化史」 朝鮮史研究会編 『朝鮮史研究入門』 名古屋大学出版会。

伊藤亜人

一九七七 「契システムにみられる chinan-sai の分析——韓国全羅南道珍島における村落構造の一考察」 『民族學研究』 四一(四)。

一九八〇 「両班の伝統と常民——韓国社会の文化人類学的考察」 『中央公論』 九五(四)。

柏村 勲

一九六二 『素晴らしいヨット旅行』 文藝春秋新社。

金 蓮子

二〇二二 『基地村の女たち——もう一つの韓国現代史』 山下英愛訳、御茶の水書房。

クーパー、アダム

二〇〇〇 『人類学の歴史——人類学と人類学者』 鈴木清史訳、明石書店。

クリフォード、ジェイムズ& マーカス、ジョージ編

一九九六 『文化を書く』 春日直樹他訳、紀伊國屋書店。

ターナー、ヴァイクター

一九七六 『儀礼の過程』 富倉光雄訳、思索社。

全 京秀

二〇〇四 『韓国人類学の百年』 岡田浩樹・陳大哲訳、風響社。

ホワイト、ウィリアム・フット

二〇〇〇 『ストリート・コーナー・ソサエティ』 奥田道大・有里典三訳、有斐閣。

マーカス、ジョージ& フィッツシャー、マイケル編

一九八九 『文化批判としての人類学——人間科学における実験的試み』 永渕康之訳、紀伊國屋書店。

リーチ、E・R

一九八七 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫訳、弘文堂。

ルイス、オスカ

二〇〇三 『貧困の文化——メキシコのへ五つの家族』 高山智博他訳、ちくま学芸文庫。

【英註】(ハルノアベミト書)

Fabian, Johannes

1983 *Time and the Other: How Anthropology Makes its Object*, Columbia University Press.

Foster, George M.

1965 "Peasant Society and the Image of Limited Good," *American Anthropologist*, 67(2): 293-315.

Gluckman, Max

1956 *Custom and conflict in Africa*, Blackwell.

Moon, Katharine H.S.

1997 *Sex among Allies: Military Prostitution in U.S.-Korea Relation*, Columbia University Press.

Osgood, Cornelius

1951 *The Koreans and Their Culture*, The Ronald Press Company.

Redfield, Robert

1956 *Peasant Society and Culture: An Anthropological Approach to Civilization*, University of Chicago Press.

Royal Anthropological Institution of Great Britain and Ireland, A Committee of the

1951 *Notes and Queries on Anthropology, Sixth Edition*, Routledge and Kegan Paul Ltd.

Wallerstein, Immanuel

1997 "The Unintended Consequences of Cold War Area Studies," Noam Chomsky et al., *The Cold War and The University: Toward an Intellectual History of the Postwar Years*, The New Press.

【ブランド著作目録】

※ C V (一九八七年版) をもとに作成した。C V の書誌情報が誤っていることが確認できた場合は訂正した。博論を除いては活字化されたものに限定し、多数ある未公刊の講演原稿等は省略した。

- 1963 “Landlord-Tenant Relations in Republican China,” *Papers on China*, No.17, Harvard University.
- 1968 “A Structural Study of Solidarity in Üihang Ni,” Ph.D. Thesis, The Department of Anthropology, Harvard University.
- 1969 “Some Ways of Looking at Village Values,” A. Nahm ed., *Studies in the Developmental Aspects of Korea*, Kalmazoo, pp.84-97.
- 1970 “Mass Migration and Urbanization in Contemporary Korea,” *Asia*, Winter 1970/1971, pp.31-47.
- 1971 *A Korean Village: Between Farm and Sea*, Harvard University Press.
- 1973a 「서울의 貧民街와 離農民」, 韓國研究室 ed., 『韓國의 傳統과 變遷』 아세아문제연구소, pp.141-158.
- 1973b 「外國人이 본 새마을事業」 『 통일생활 (대공문제연구소)』 39: 63-65.
- 1974 “Skiing Cross-Culturally,” *Current Anthropology*, 15(1): 64-66.
- 1975 『韓國의 村落』 trans. by 金瑄奉, 時事問題研究所.
- 1976a “Reply to Befu’ s Comment on Brandt’ s Review,” *American Anthropologist*, 78(2)352-354.
- 1976b “Mutual Hostility,” *The Wilson Quarterly*, 2(4): 186.
- 1977a *Community Development in Korea*, (with Dr. Man Gap Lee) , UNESCO. [韓国語版は 1979 年]
- 1977b “Rural Development and the New Community Movement in South Korea,” *Korean Studies Forum*, 1: 32-39.
- 1978a “The New Community Movement: Planned and Unplanned Change in Rural Korea,” *Journal of Asian and African Studies*, 13 (3-4) : 196-211.
- 1978b “Case Studies of Small and Medium Enterprises,” Jones and Il Sakong eds., *Government, Business, and Entrepreneurship in Economic Development: The Korean Case*, Harvard University Press, Cambridge, 1980, pp.313-342.
- 1979a 『韓國의 地域社會開發—— 4 개 새마을部落의 事例研究』 (with 李萬甲)、유네스코韓國委員會.
- 1979b *Planning from the Bottom Up: Community Based Rural Development in South Korea*, ICED, Essex, Conn. (with Chung Chi Woong) [韓国語版は 1980 年]
- 1979c “Rural Development in South Korea,” *Asian Affairs*, 6(3): 148-163.
- 1979d “Sociocultural Aspects of Political Participation in Rural Korea,” *Journal of Korean*

フィールドワークを歴史化する

Studies, 1: 205-223.

- 1980a 『住民主導型 地域社會開發計劃——한국의 지역사회總合開發사업 (CBIRD)』
(with 정지웅) 正民社.
- 1980b “People, Family, and Society,” (with Yun Shik Chang) Studies of Korea: A Scholar’s
Guide, Han-kyo Kim ed., University of Hawaii Press, pp.249-273.
- 1980c “Local Government and Rural Development,” Rural Development: Studies in the Mod-
ernization of the Republic of Korea 1945-1975, Sung Hwan Ban et al. eds., Harvard
University Press, pp.260-280.
- 1980d “The Agricultural Sector in Contemporary South Korea,” Asian Affairs, 7(3): 182-194.
- 1980e “Some Factors Associated with Social Mobility among Migrant Squatters in Korea,”
Papers of the First International Conference of Korean Studies, The Academy of Ko-
rean Studies, pp.1207-1226.
- 1981a “Community Development in the Republic of Korea” (with Man Gap Lee) , in Dore
and Mars eds., Community Development, Croom Helm / UNESCO, pp.49-136.
- 1981b “Value and Attitude Change and the Saemaul Movement,” Man Gap Lee, ed., Toward a
New Community, Institute of Saemaul Undong Studies, Seoul National University.
- 1982a “Upward Bound: A Look at Korea’ s Migrant Squatters,” Korean Culture, 2(4): 16-27.
- 1982b “Top-down and Bottom-up Rural Planning in South Korea” (with Ji Woong Cheong) ,
Development Digest, 20 (2) : 38-58.
- 1983a South Korean Society in Transition, Philip Jaisohn Memorial Foundation, Inc.
- 1983b “North Korea: Anthropological Speculation,” Korea & World Affairs, 7(4): 617-628.
- 1983c “Change and Continuity in Korea: A Critique of American Perspectives,” Reflections
on a Century of United States-Korean Relations, University Press of America, pp.157-
172.
- 1985a “Stratification Integration and Challenges to Authority in Contemporary South Korea,”
Korea Past, Present and Future, the Aspen Institute for Humanistic Studies.
- 1985b “Aspirations and Constraints: Social Development in South Korea by the Year 2000,”
『아세아연구 (고려대학교)』 , 28 (2) : 95-110.
- 1986 “Chapter 8 Korea,” Lodge and Vogel, eds., Ideology and National Competitiveness,
Harvard Business School Press.
- 1990 “South Korean Society,” Chong Sik Lee, ed., Korea Briefing 1990, Westview Press,
pp.75-96.
- 1993 “The Chosen Women in Korean Politics: An Anthropological Study,” Korea Journal,
33 (1) : 107-109.
- 1997 “Some Aspects of South Korean Attitudes Towards the DPRK,” Sol Sanders ed., The
U.S. Role in The Asian Century, University Press of America, pp.321-338.
- 2011 『한국에서 보낸 나날들——인류학자 빈센트 브란트 박사의 마을현지조사 회고
록』 해외사료총서 24, 국사편찬위원회.

執筆者一覧（掲載順）

植村幸生	東京芸術大学音楽学部教授
山内文登	国立台湾大学音楽学研究所副教授
林 慶花	仁荷大学校 韓国学研究所 H K 研究教授
板垣竜太	同志社大学社会学部准教授
文 聖姫	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
許 銀珠	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程
本田 洋	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
嶋陸奥彦	東北大学名誉教授
安 在媛	東京大学大学院基礎文化研究科博士課程
坂崎基彦	ソウル大学校社会科学大学言論情報学科博士課程修了

韓国朝鮮の文化と社会 第 12 号

2013 年 10 月 15 日発行
発行所：韓国・朝鮮文化研究会
発売元：風響社
〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
電話 03-3828-9249
印刷所：モリモト印刷

© 2013 Printed in Japan ISBN978-4-89489-962-9